

ネパール・ナウリコット村再生計画 事前調査報告書

2009年9月

NPO 景観デザイン支援機構

目次

1. はじめに(背景と目的)
2. 地区周辺の状況と課題
3. 対象集落の構造と配置
4. 廃屋再生・再建の可能性
5. 道路・下水状況
6. 地域再生のための課題
7. ナウリコット村再生プロジェクトの方向
8. インターカレッジ構想

付. 現地事前調査団の概要

1. はじめに(背景と目的)

対象地域は、8000m級のダウラギリ峰とアンナプルナ山群に挟まれ、昔よりチベットとインドを結ぶ交易路として、またヒマラヤ・トレッキングルートとして有名なカリ・ガンダキ渓谷に面している。気候的には亜熱帯からチベットの風景に移り変わる境目にあたる景観的、人文的にも貴重な環境を残す地域である。

対象集落は、標高約2700mの小尾根上にあり、3000年前より存在するグルサンポ洞窟への巡礼により発達した歴史を持つ。産業としては自給的な農業しかなく、近年は若者の都市部への流失により、人口減少、高齢化が顕著である。このため集落内では廃屋化と住居の崩壊が進み、村の活力が衰退しつつある。

加えて、カリ・ガンダキ河沿いには、近年、下流部より道路整備が進み、自動車の進入により今後は観光客(ムクチナートなど聖地へのインド人巡礼者などを含む)が増え、周辺では安易なロッジや店舗建設が散見され、排水の垂れ流しなど生活環境問題の顕在化や周囲の自然や伝統的風土景観が壊れつつある。

このような背景の下、問題の進行による村の崩壊を食止め、当地域の世界的にも貴重な資源、資産の保全を講じることは喫緊の課題である。

これらの過程で、地域振興を実践している地元リーダーより本会役員を通して協力要請があり、本会としては現地事情を視察し、ニーズの確認を行なうため2009年4月に事前調査を行った。本報告書は、その概要を紹介するものである。

2009年9月

NPO 景観デザイン支援機構
ネパール・ナウリコット村再生プロジェクト部会³

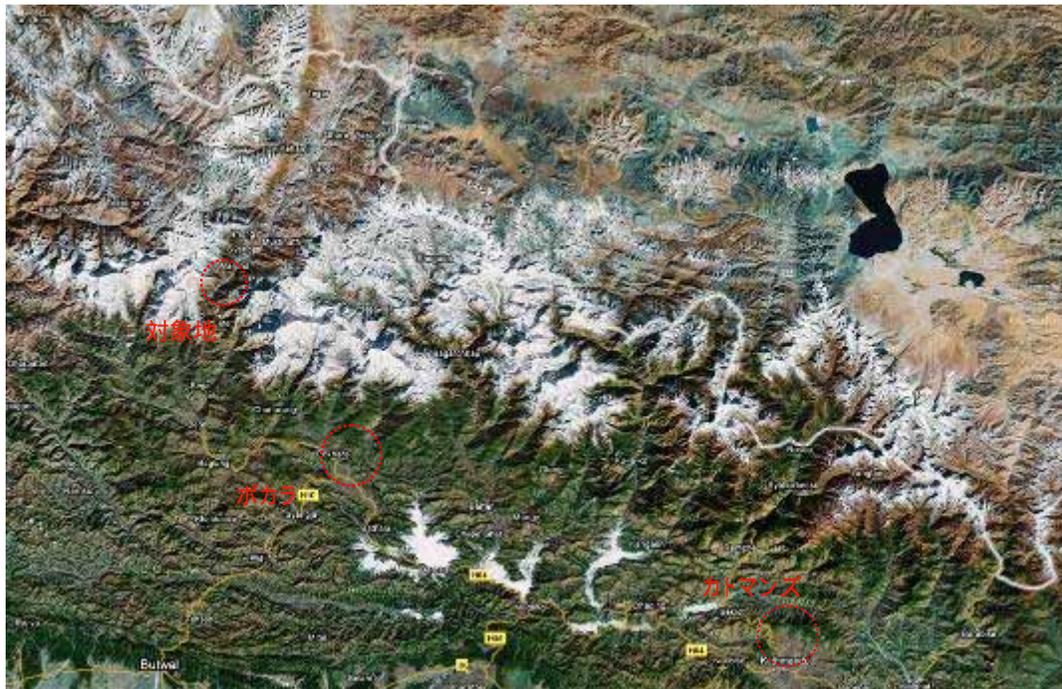
対象地区の位置



・対象地区 ダウラギリ県ムスタン郡ナウリコット村は、ネパール国中西部にあり、ヒマラヤ山脈のダウラギリ峰(8176m)とアンナプルナ峰(8091m)の間に位置する。

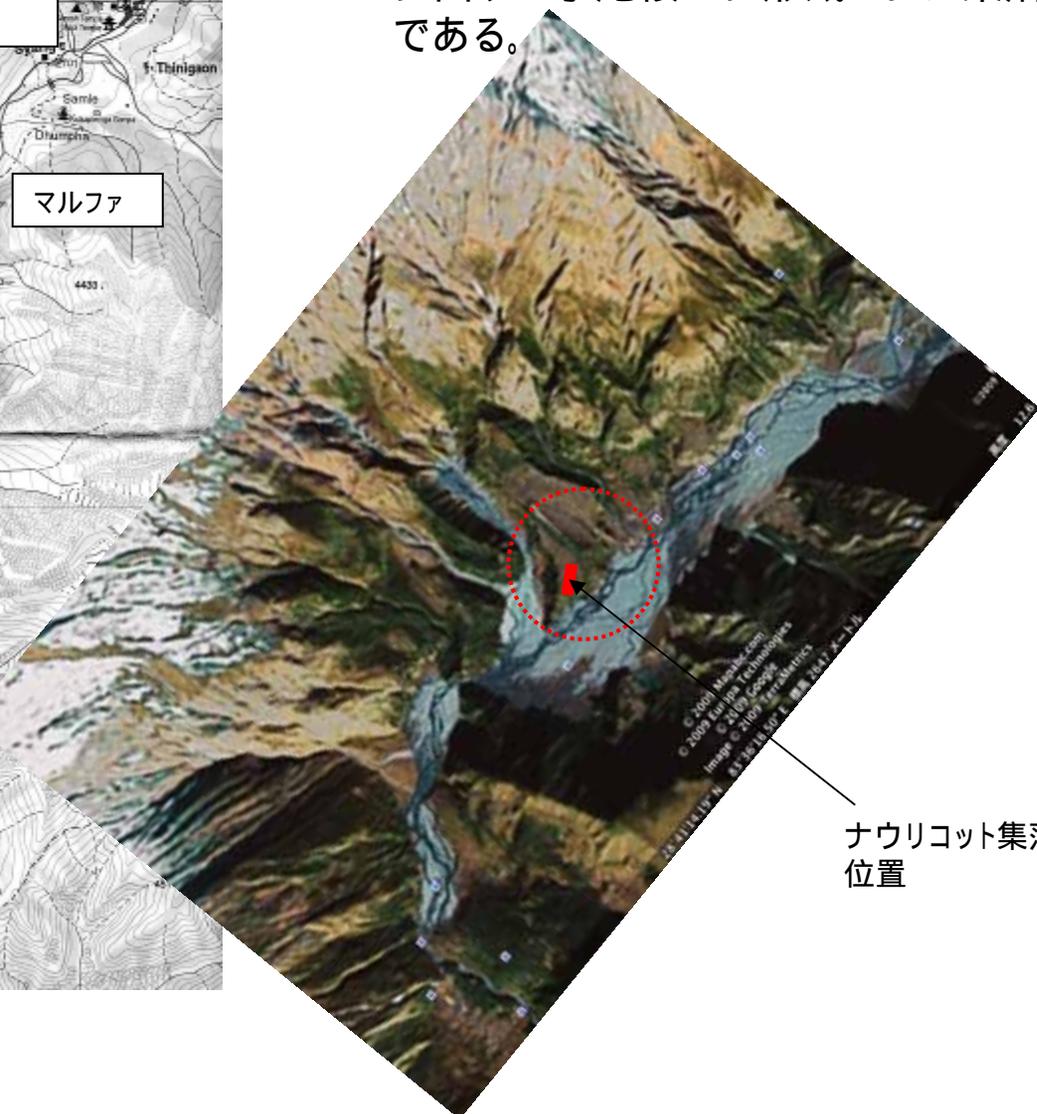
・首都カトマンズからは、約200km西方の国第2の都市ポカラを経由して、ポカラから徒歩で約5日の行程である。空港のあるジョムソンへ飛行機を利用すれば、ジョムソンより徒歩約5、6時間の行程である。

・なお、近年、ポカラより自動車道路がカリ・ガンダキ川に沿って開通し始め、車を使えば1日で到着可能であるが、急峻な渓谷に粗雑な造成により開き、悪路であることに加えて土砂崩れ等で不通になることも多い。





・ナウリコット村は、ヒマラヤ山脈を南北に横断して流れるカリ・ガンダキ川に面する小尾根上に形成された集落である。



ナウリコット集落位置

2. 地区周辺の状況と課題

ジョムソン

- ・ポカラから午前中、数便運航されるが、天候によって欠航となる日も多い。
- ・ジョムソンは、北へムスタンを経てチベットに続き、また。ムクチナートなどの聖地に向かう街道の要所で国境警備の拠点の街である。



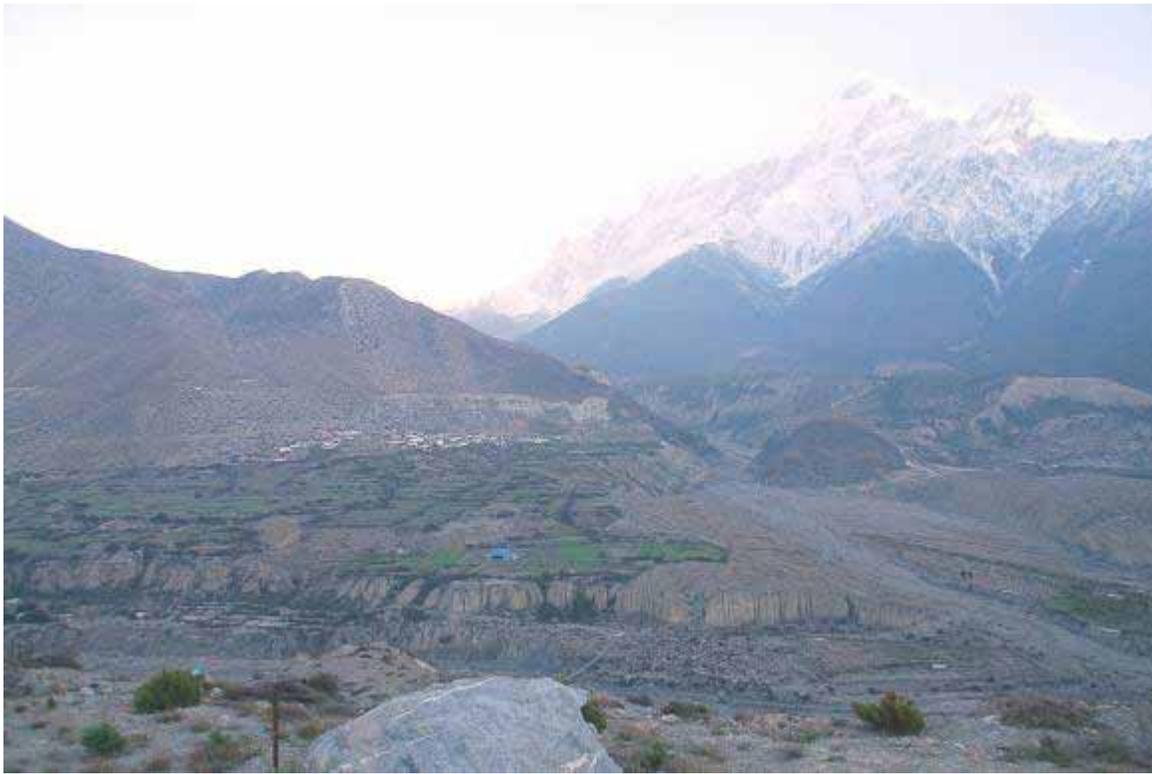
8000m級の山の谷間を飛ぶスリリングな飛行



飛行機はツインオッター機、定員は20席くらい。

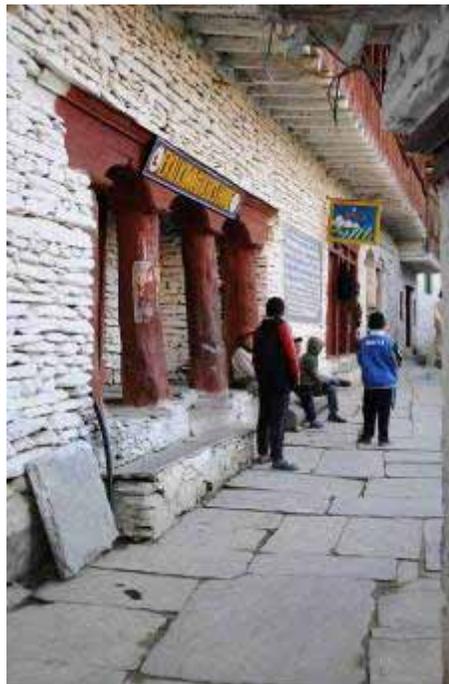
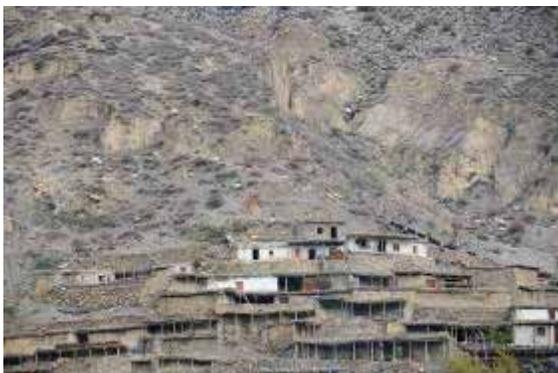
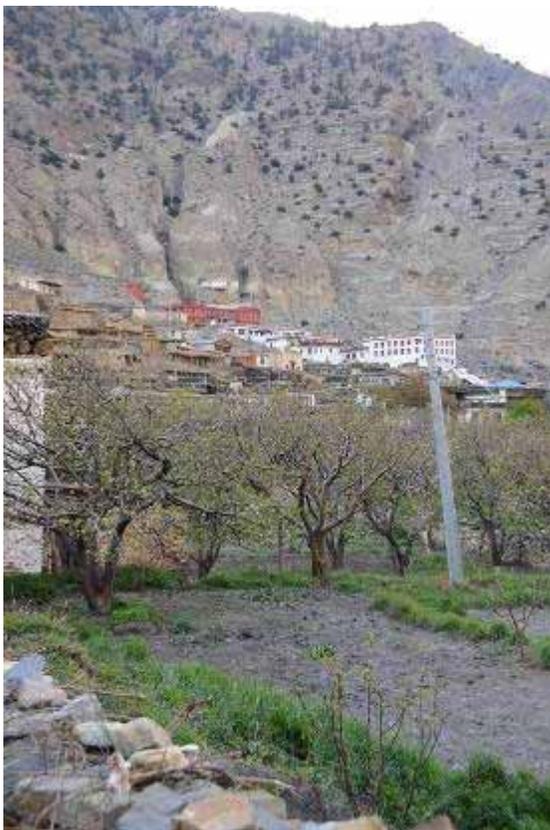


いかにも街道街の風情の街並み



チベットの光景が続くジヨムソン、マルファ周辺の風景。カリ・ガンダキ川を南下するにつれて緑が増える。





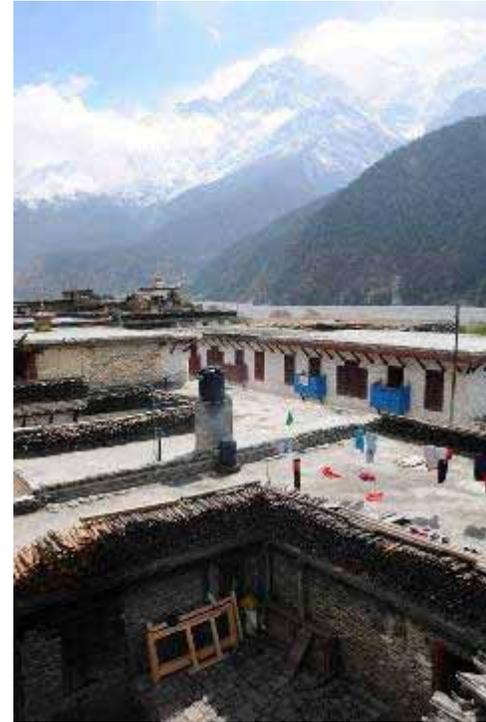
マルファ周辺

- ・マルファは、白壁に塗られた街並みを持つ美しい街道街。ロッジや土産物店が
- ・舗石も大きな石が使われ、豊かさを感じられる。
- ・林檎が特産で、果樹園が開かれ、ジュースなどの特産品もある。
- ・一般の部落の家は石積み、平屋で周りの岩山と同化している。

ツクチェ



ツクチェはチベット・インド交易商人タカリー族の拠点で街道の中心地。



交易で財をなした立派な商家の家が並ぶ。中庭を持つ2、3階建、降水が少ないため平屋で、屋上が作業や交流の場。



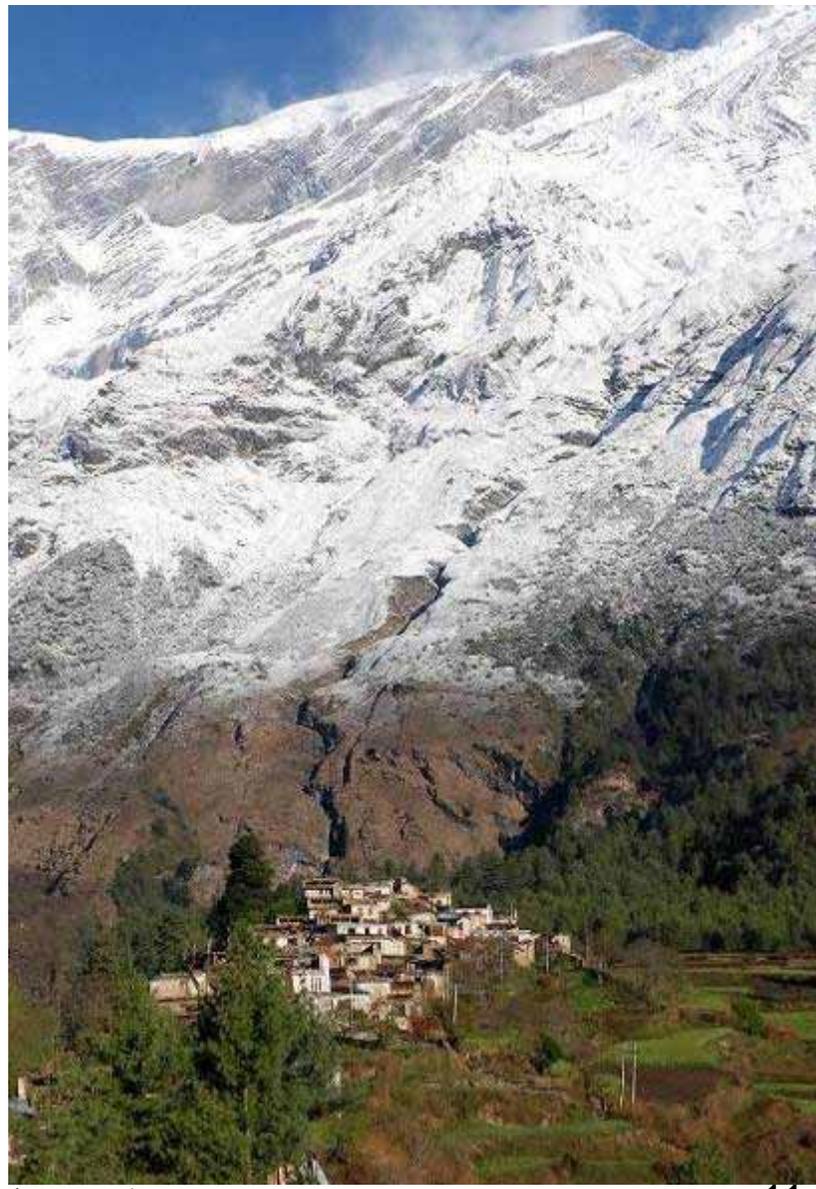
ナウリコット村入口から見るカリ・ガンダキ川の広い川原。下の村はラルジュン村。このあたりでは、やや樹林が出てくる。針葉樹が多い。下流は川幅が急激に狭くなり溪谷になる。



ナウリコット村より西方に見るダウラギリ峰



東方に見えるニルギリ峰(アンナプルナ峰前衛)



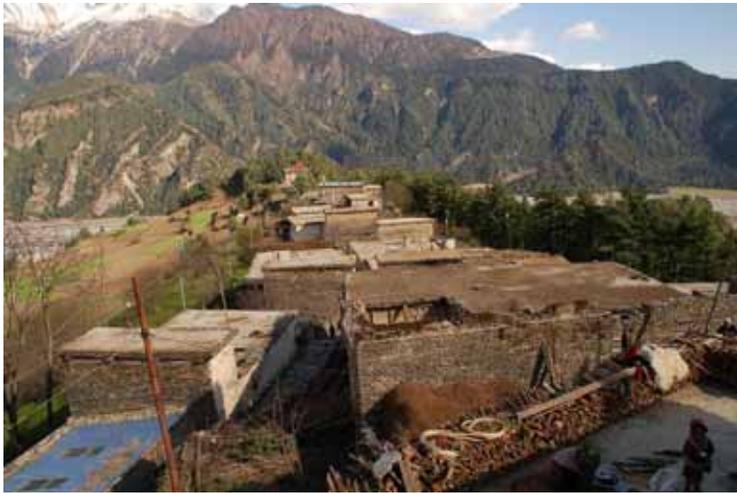
ダウラギリ峰の東山麓に位置するナウリコット村



ダウラギリ峰東山麓の小尾根にのるナウリコット村

- ・戸数 30数戸 / 人口 約150人、標高 約2700m。西北側に樹林、南東側に畑地が広がる。
- ・自然と地形、環境と調和した風土景観。

3. 対象集落の構造と配置



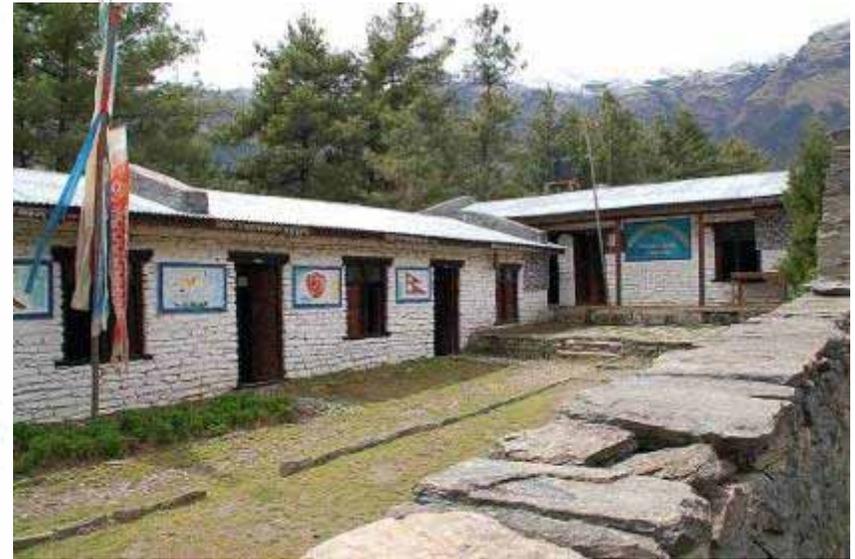
集落の中ほどから南側を見る。

- ・ナウリコット村はヒマラヤ有数のトレッキング街道であるカリ・ガンダキ河原(ラルジュン村)から約100m登り、ほぼ南北に走る小尾根上にある。
- ・集落は、3000年前より聖地グルサンポ洞窟への巡礼路として発達した。
- ・集落はほぼ一本の尾根道沿いに形成され、両側は畑地と樹林地で挟まれている。



村の入り口付近(南部分)

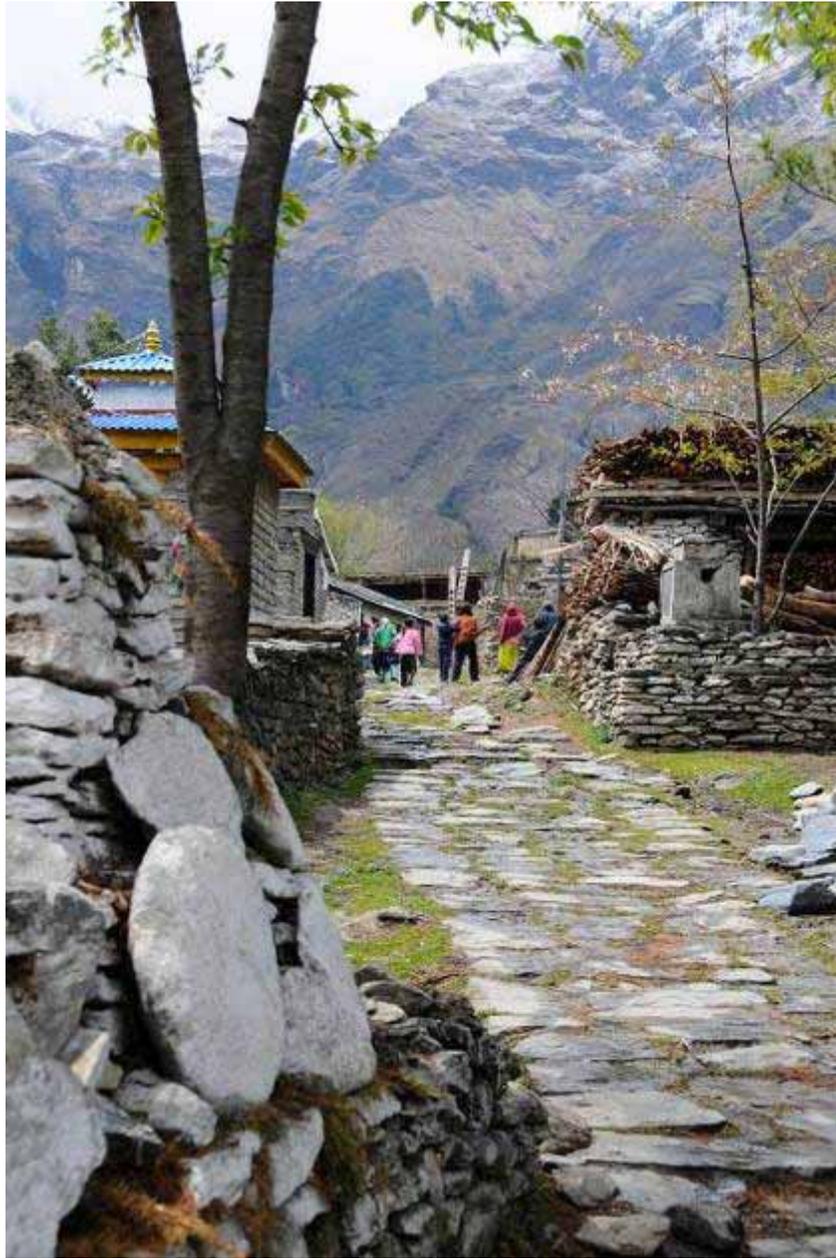
車道をつくる計画が進んでいる。(途中まで工事中)



タサンロッジ

村の小学校(海外の援助が入っているらしい)





ダウラギリを正面に見ながら村に入る。





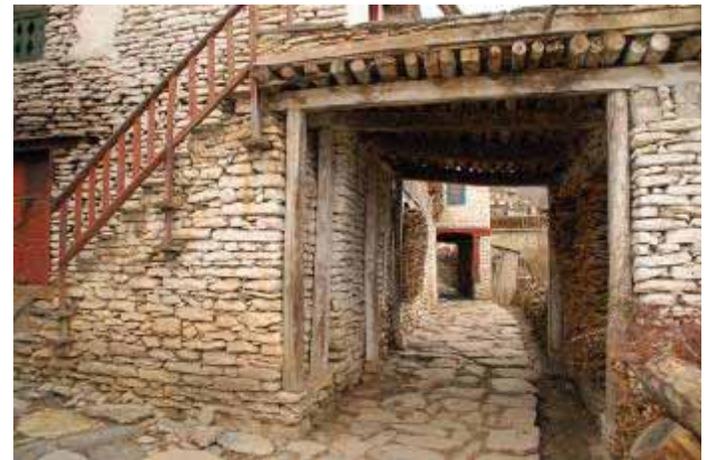
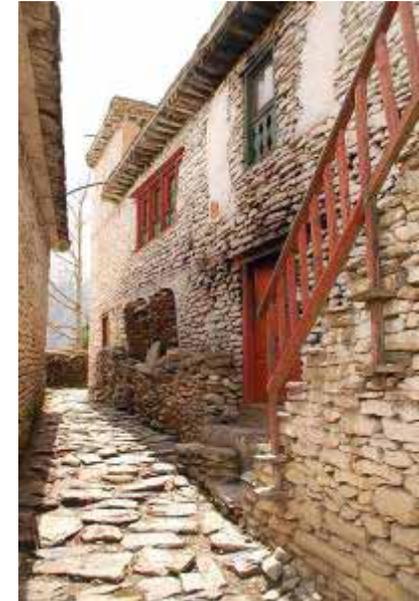
集落内のメイン道路 石を敷詰め地形に合わせる



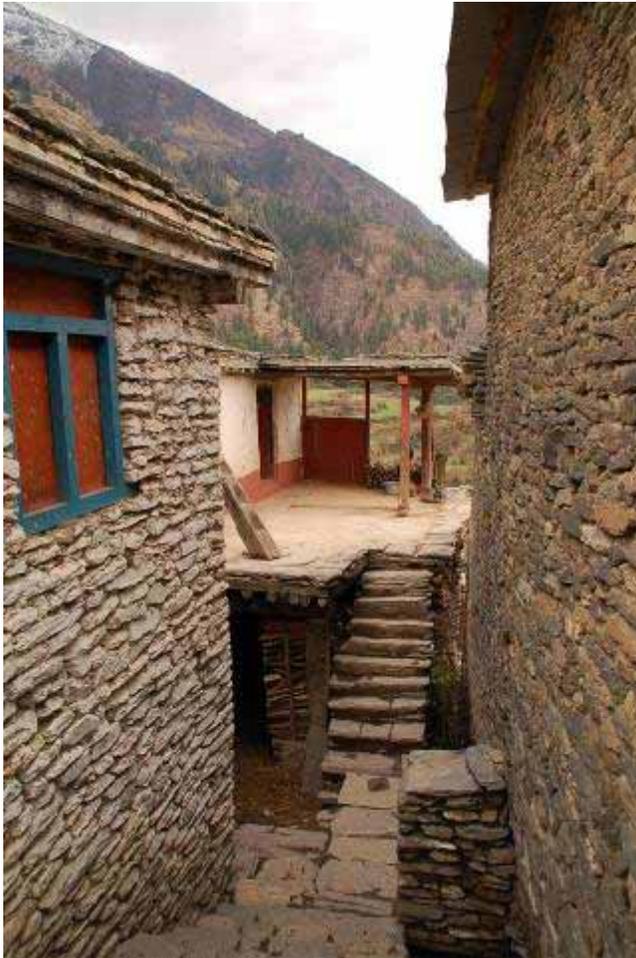
村の中央部付近

尾根上の土地を有効に利用し、高密度に建てられている。

石積みのファサードと重なり、都市的な印象も与える。



土地の高低差に合わせた建築



農作物は自給自足分のみ。

麦、蕎麦、大根、ジャガイモ、きのこ類



東側の畑から見る集落のシルエット



西側は急斜面の段畑、以前の住居跡か。17

村の北部

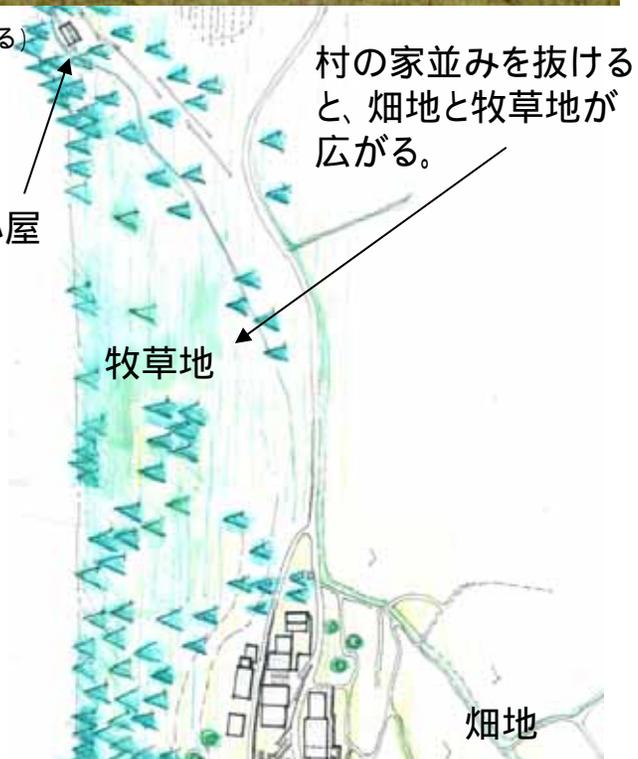


西側畑地から北西側を見る



村の北外れにある聖地グルサンポ洞窟巡礼者のための宿泊小屋(3000年前より巡礼者を集めている)¹⁸

(グルサンポ洞窟に至る)



村の家並みを抜けると、畑地と牧草が広がる。

水車小屋

牧草地

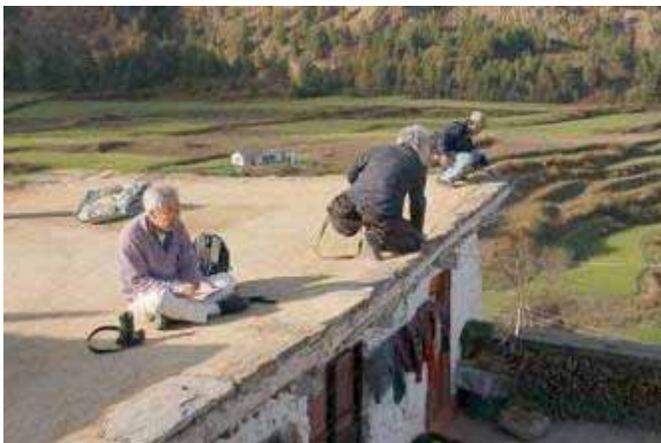
畑地

ビデオによる実測調査



・集落の建物配置や屋根伏形状を調べるため、ビデオカメラに竿をつけ、高所から撮影した。

・同時に、建物外形寸法実測、外観スケッチ、建物内部調査などを行った。



住宅の住まい方



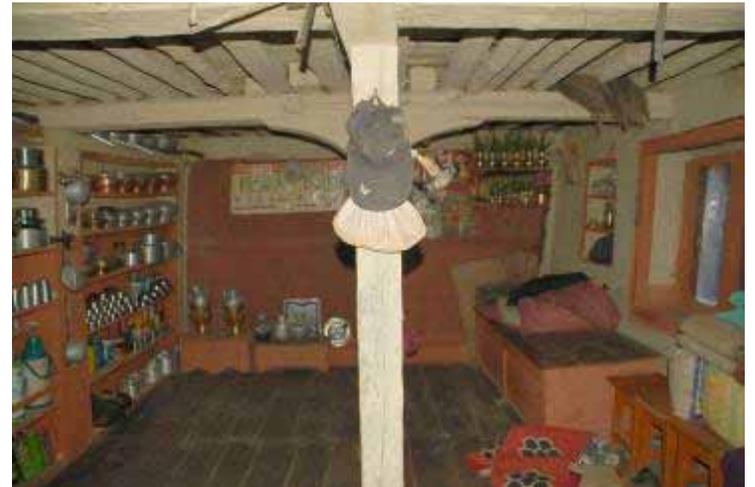
若い夫婦と子供の世帯構成



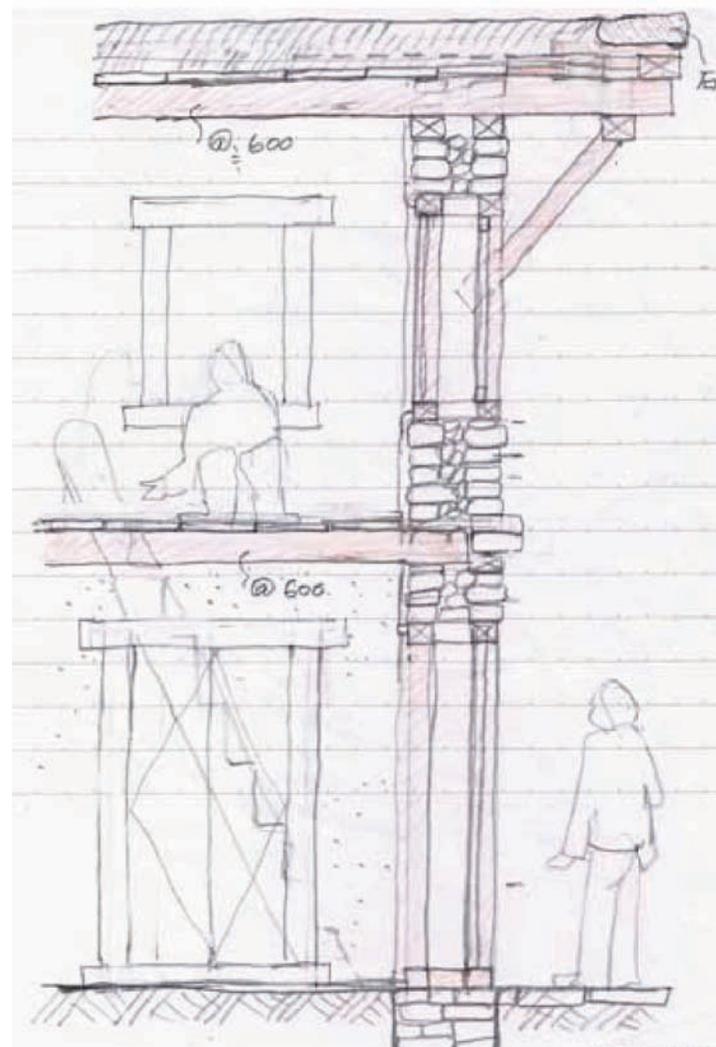
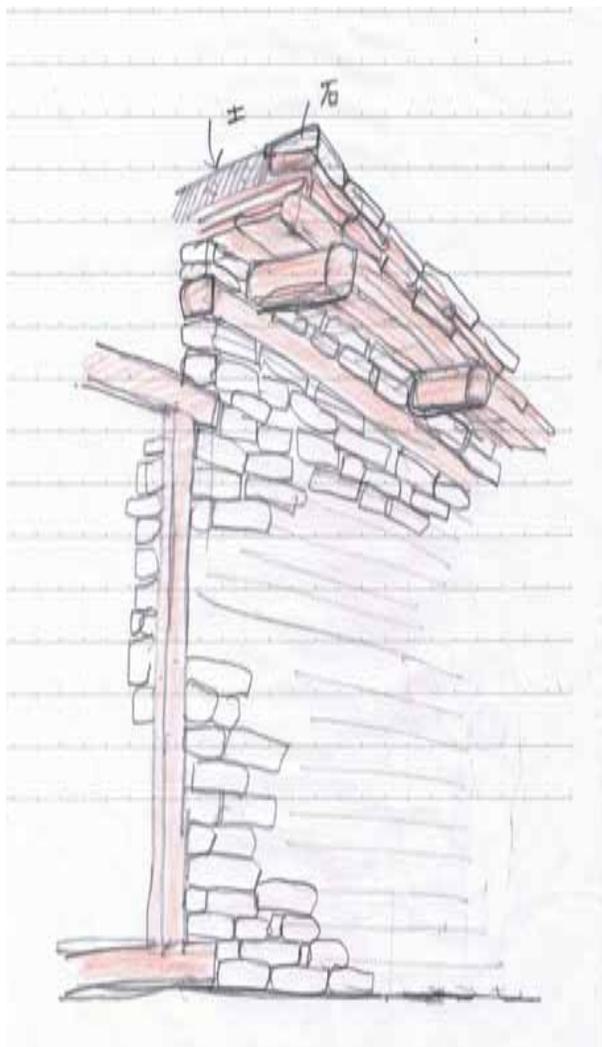
居間・食堂



ものが整然と整理されて置かれる。



- ・住宅の屋根とケラバの構造
- ・今後、詳細調査を行う。



(タカリー族民家の典型的内部)



- ・竈を中心に居間、食堂が配置される。
- ・全体に物は少ないが、調理器具などが整然と並べられる。
- ・床と壁の腰あたりまで赤土が塗られる。
- ・掃除が行き届いており、チリ一つない。毎朝、これらを完璧に行うことが、主婦の務めとされている。



居間・食堂



台所

4 . 廃屋再生・再建の可能性



- ・全体で35、6戸の集落であるが、目視する限り、数個の廃屋が残されている。
- ・さらに、現在は段畑になっている土地もかつての住居跡と思われ、昔はさらに人口・世帯も多かったと思われる。
- ・若い世代が都会に流失し、残る高齢者は村から、下の集落に住む親族の家に移り、家屋は無人化する。
- ・無人化した家屋は、木材の梁、天井が竈の煙で燻されなくなり虫に食われて腐食し、屋根が落ちる。
- ・地形的に、狭い尾根上に建物が密集し、相互に依存して建てられている住居群であるので、隣家が滅失することで構造上の問題も発生していると思われる。
- ・集落全体での住まい方など、コミュニティ維持も難しくなる。



建物の工法



- ・建築の素材は石と木、泥のみ。
- ・木材で戸や窓の枠を作り、間に石を詰める。壁は外、内に石を並べ間に土などを詰める。厚さは、18インチ(45cm)
- ・木材は、比較的立派なものがあり、10cm角くらいは取れるようだ。
- ・木材は低地では枯渇し、標高3000m以上で伐採しているようだ。
- ・新築工事費は、約4~5万円/坪
石工・大工 600ルピー(1000円)/日
- ・素材が限定されている中で、何ができるのか、学生達に考えさせる方法もある。



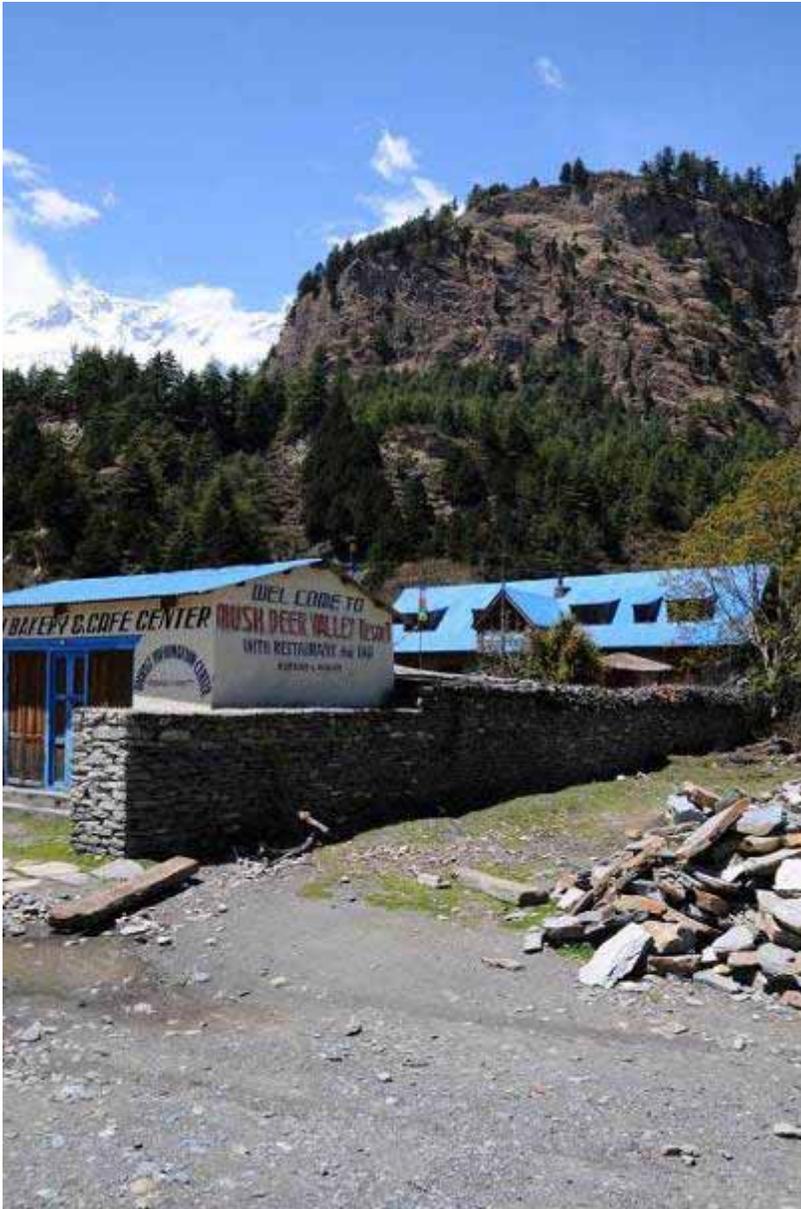
景観上の問題(新建材、異様式の浸透)

・近年、急速に鮮やかな青色のカラー鉄板が使われ始め、村の伝統的景観を壊している。

何らかの規制が考えられるべき。

・加えて、低地地方の勾配屋根の建築が移住者によって作られ始めた。

下のラルジュン村(青い屋根が目立ってきた)



5 . 道路・下水・防災状況



・カリ・ガンダキ川沿いのジョムソン街道は元々、馬や歩行用の道であった。

・しかし、近年、ポカラより延びるバグルン自動車道が下流部より延伸し、この1、2年で計画地周辺から更に、上流の聖地ムクチナートまで開通した。(このため、ポカラより当地は陸路で、一日行程となった。)

・幹線道路として、政府レベルで推進されている事業であるが、急峻な地形や河川内を通過するため、自然地形や環境と馴染ませて造成されるべきである。



・崖地を素掘りでつくったような造成。災害を受けやすい。雨季は崩れて不通になることも多い。

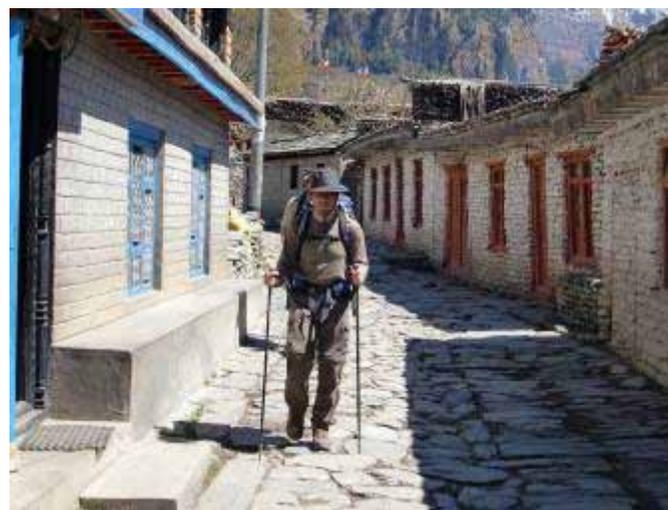
・現在では、通行車両はジープ、小型トラック、トラクター、バイクなどに限られている。

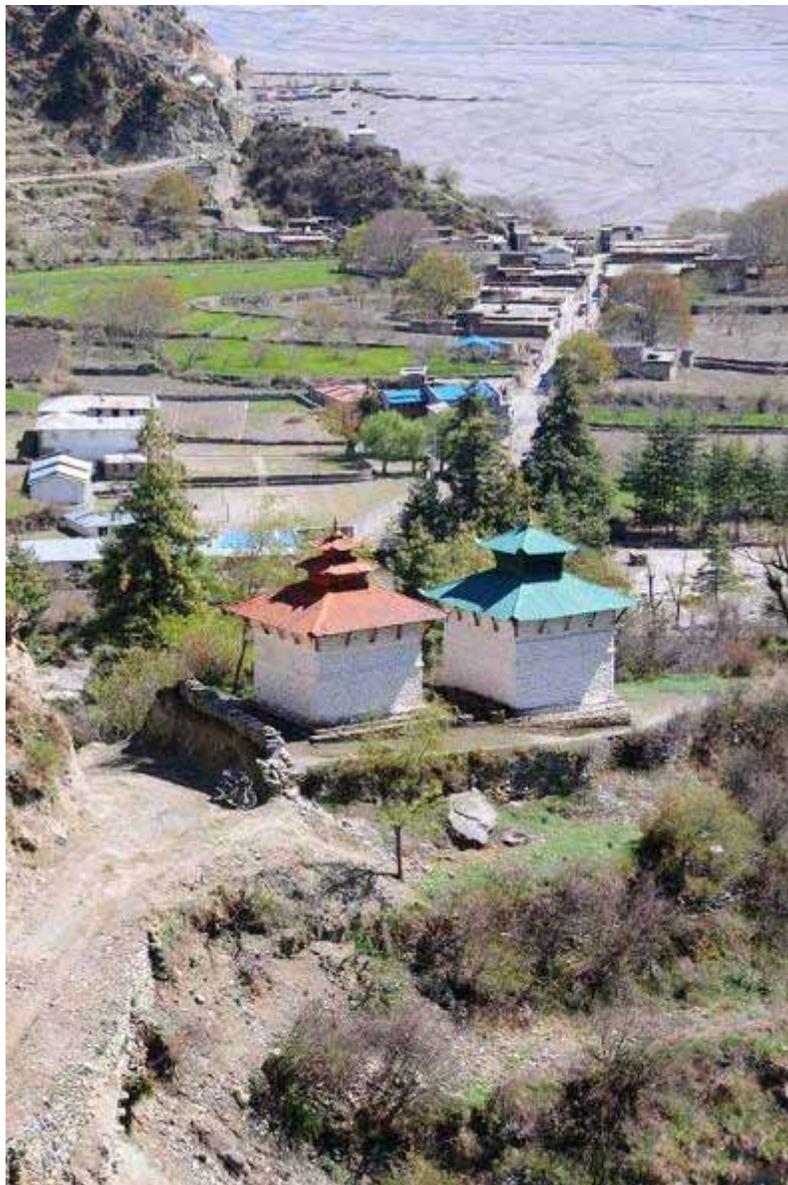




・現在は、車と歩行者、トレkkerが混在している。近い将来には、ジヨムソン街道自体は、トレッキングの歩行ルートとして存続が難しいかも知れない。

・沿道の村の中の旧道は歩行に快適だが、車の進入に荒らされない対策が必要である。





・川原沿いの自動車道から、尾根上のナウリコット村に向けても、車道の造成が行われている。

・ブルドーザーによる素掘りで、崩壊しやすい造成である。



排水路(ラルジュン村 - 川原沿いの村)



・車道を兼ねた道路で、排水管が埋設されているようである。

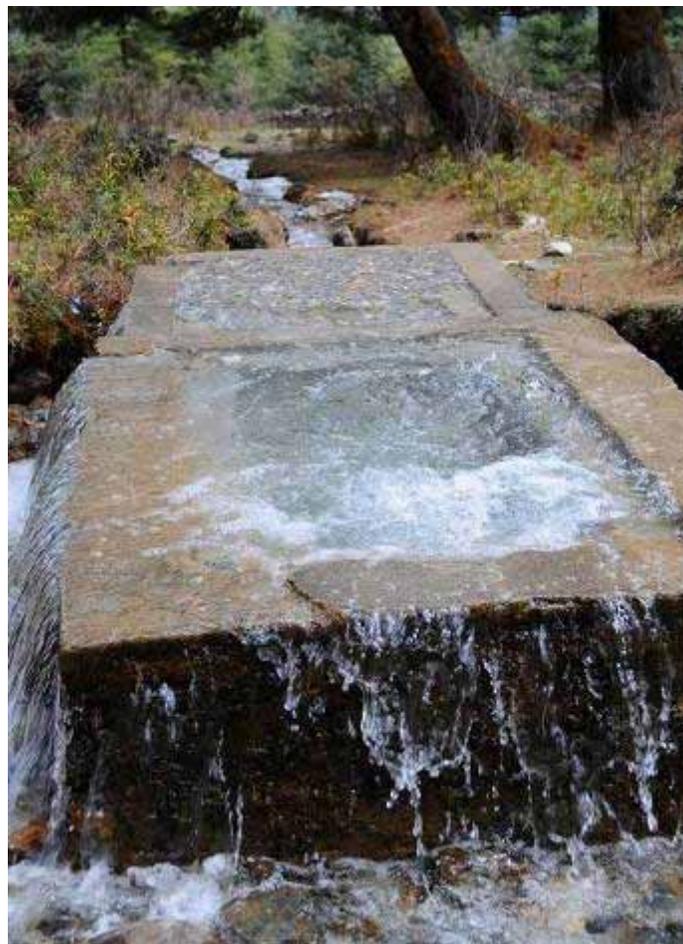
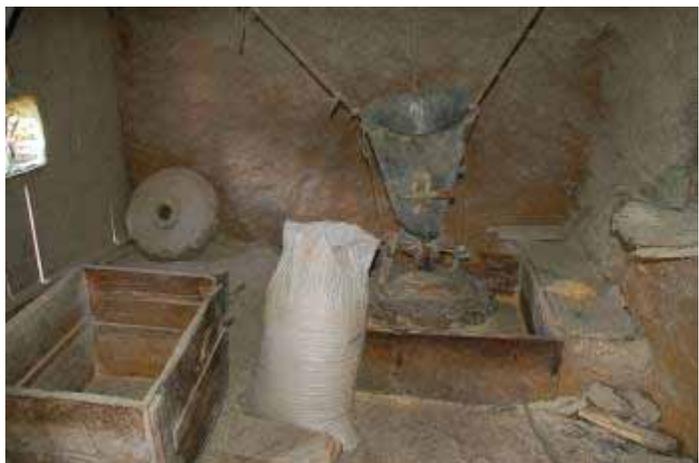
・村内の一般的な排水路で、カリガンダキ川に直接放流されている。



豊富な水

・周辺の谷川から集水してタンクに入れ、パイプで各戸に送水している。将来的には、家畜等による水質汚染が懸念される。

・水力を使った製粉が行われている。

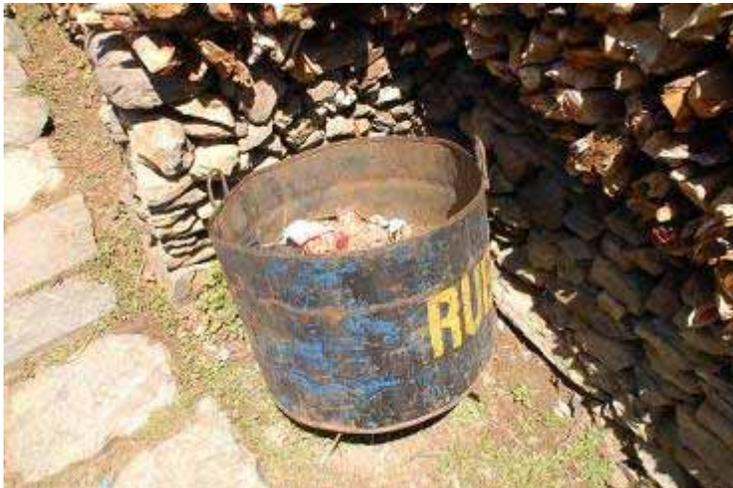


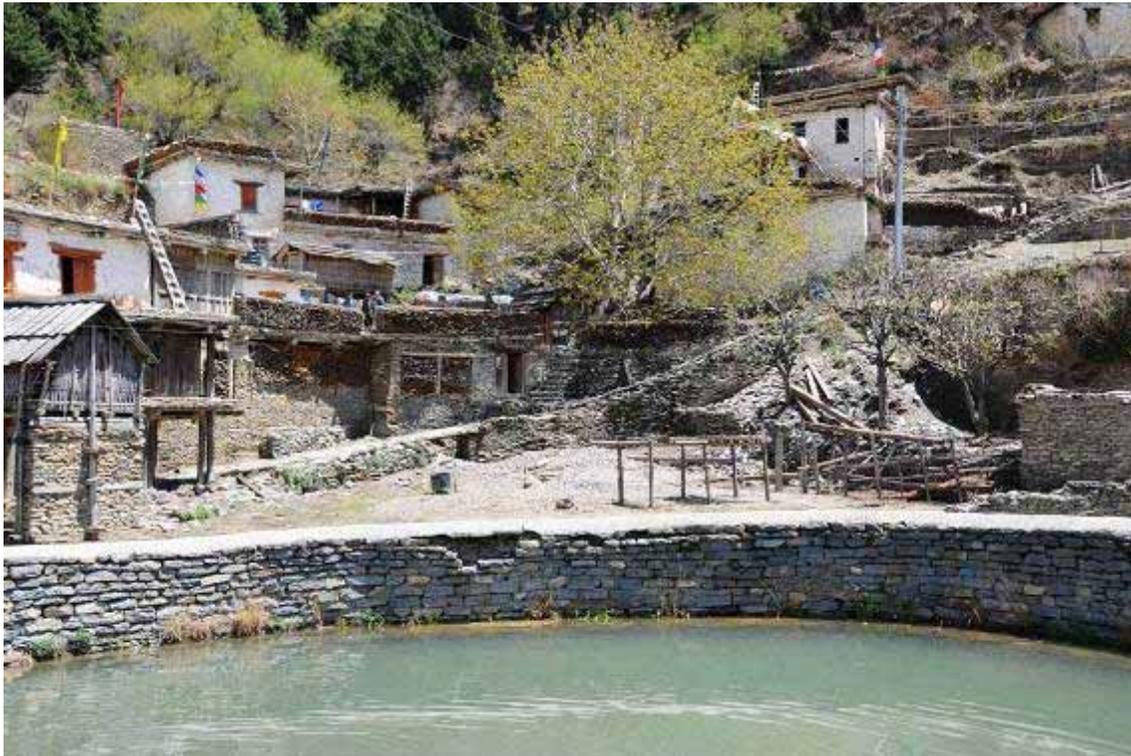


・村の共同水栓場

・パイプによる各戸排水がされている状況。

・ゴミ収集はかって、外国のNGOによる活動があったようだ。

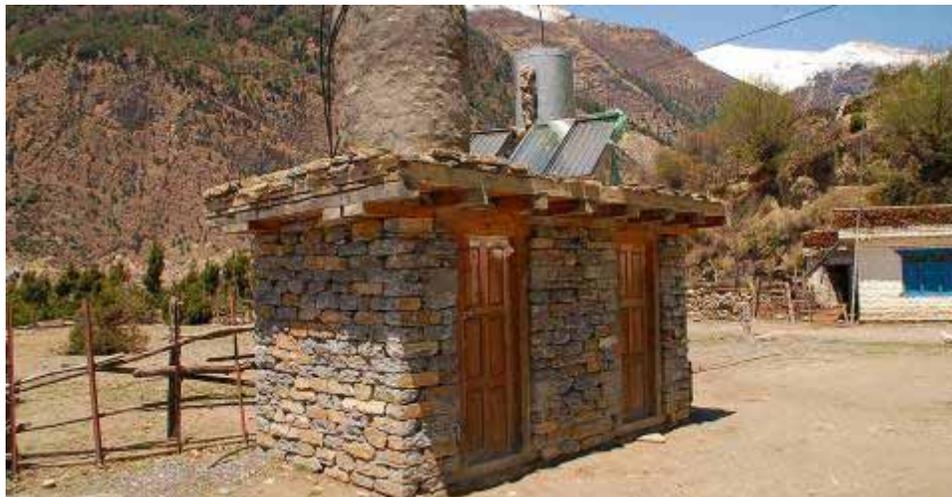




(豊富な水利用の例)

・カリ・ガンダキ川の対岸のサウル村では、豊富な水を利用して魚の養殖を行っている。

・下段の写真は、学校のグラウンドの横につくられたソーラー温水シャワー室



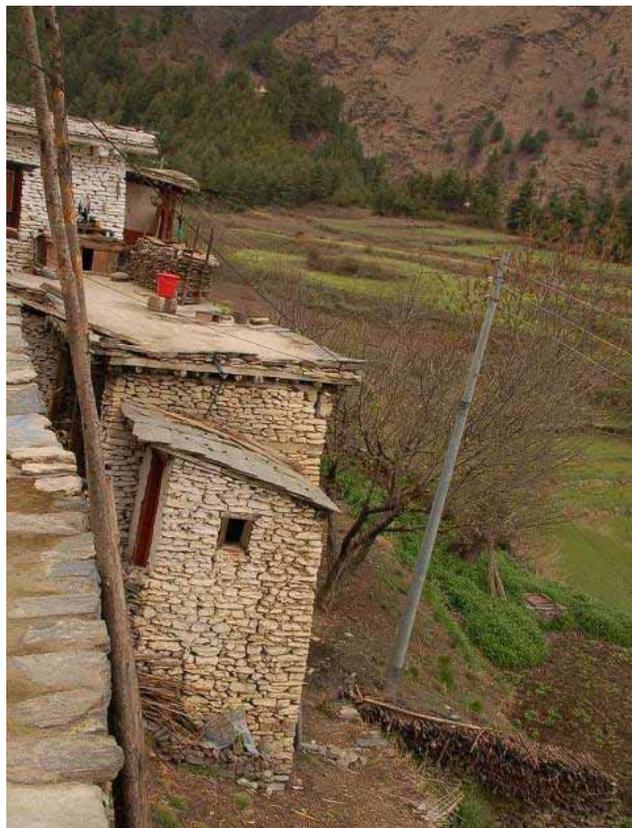
生活排水



- ・村の中での洗濯風景
- ・排水はそのまま道路の垂れ流し。
- ・炊事用の排水も道路脇の溝に流す。



トイレ



- ・汚水は、素穴を掘って溜め込む方式。
- ・満杯になれば、一定期間放置し、その後は肥料として使う方式と思われる。
- ・トイレは基本的には戸外あるいは隣接して各戸づつあるようである。
- ・建物の1階は家畜小屋になっており、松葉を敷詰め、家畜の糞尿と混ぜて堆肥をつくる。(50年前の日本と同じ)
- ・最近、街道筋では浄化槽方式が増えているが、処理が不十分なものが多く、カリ・ガンダキ川の汚染の心配がある。



6. 地域再生のための課題

1) ナウリコット村及び周辺地域の課題

村の社会経済構造

- ・近年、教育の普及とともに外部情報が入り、都会の生活に憧れて若者の流出が顕著である。高齢者が残り、村の沈滞化につながる悪循環などを断ち切り、村の崩壊を防ぐ再生計画が必要である。
- ・村の産業は農業だが、大麦、とうもろこしが中心で自給自足型で外部へは販売していない。人口が減少し、休耕地が目立ってきた。JAITI(日本の援助団体)が試験的に栽培を始めているようである。
- ・村の経済構造の構築。観光を主軸として、宿泊施設、地産地消的農業、付加価値の創出が課題である。

道路開通の影響

- ・政府の道路計画による道路整備が進行し、この影響による開発インパクトは避けられず、現在の自然や環境に馴染んだ風土景観保全のための沿道開発規制が必要になる。
- ・車とトレッキング客との混在は将来、トレッキング路としての観光的価値を失わせる恐れがある。
- ・通過交通のためのバイパスを設置し、村内の快適な歩道環境は守られるべきである。
- ・聖地ムクチナートへのインド人巡礼者の増加が予想される。当地域から、ムクチナートへの車による日帰り巡礼が可能になり、大きな開発圧力になる。(大祭の時は、1万人単位での来訪者が予想される)

建物・景観

- ・崩落建物の増加とその対策(空家化の防止、廃屋の再利用、等)
- ・建物の伝統的様式、風土景観の保全。景観的に異質な勾配屋根、青い鉄板屋根の規制

トイレ、排水設備、その他のインフラ

- ・排水処理上、問題のある浄化槽方式に替わるバイオトイレ等の開発。有機農業との関連性研究
- ・豊富な水の活用(電力、動力、飲料、産業、街の清掃、等への活用)
- ・村内道路整備と洗濯、食器洗い等の生活排水対策
- ・街道から村内への取り付け道路整備が進行中であるが、造成については慎重に行う必要がある。

2) 地域再生事業の必要性

対象地域は、8000m級のダウラギリ峰とアンナプルナ山群の間、昔よりチベットとインドを結ぶ交易路として、またヒマラヤ・トレッキングルートとして有名なカリ・ガンダキ渓谷に面し、亜熱帯からチベットの風景に移り変わる境目にあたる景観的、人文的にも貴重な環境を残す地域である。

対象集落は、渓谷に面する標高約2700mの小尾根に位置し、3000年前より存在するグルサンポ洞窟への巡礼により発達した歴史を持つ。主産業としては自給的な農業しかなく、近年は若者の都市部への流失により、人口減少、高齢化が顕著である。このため集落内では廃屋化され、崩壊した住居が発生するなど、村の社会構造が衰退しつつある。

加えて、カリ・ガンダキ河沿いには、近年、下流部より道路整備が進み、自動車の進入により今後は観光客(ムクチナートなど聖地へのインド人巡礼者などを含む)が増え、周辺では安易なロッジや店舗建設が散見され始め、垂れ流し排水など生活環境問題の顕在化や周囲の自然や伝統的風土景観が壊れつつある。

このような背景の下、これら問題の進行による村の崩壊を食止め、世界的にも当地域の貴重な資源、資産の保全をおこなうことは喫緊の課題である。

3) ナウリコット村での事業化の意義

- ・当地域の課題は、カリ・ガンダキ川沿岸の周辺地域において共通である。また、民族的にもカタリー族が主体となる地域としてタサン地域と呼ばれる同質的地域であり、周辺13集落により構成される。
- ・将来的には、このタサン地域全体に地域再生がなされることを想定して、その第1ステップとしてナウリコット村の景観的、経営的再生プロジェクトを提案するものである。
- ・ナウリコット村は、前述の如く、尾根上にあることから建物配置など整備にあたって物理的まともりも良く、村民の意識集約も比較的取りやすく、モデル的に先行整備する地区としての条件を持っている。また、本事業の初動期の活動拠点として、村に隣接するタサン・ロッジの利用が可能であり、機動的かつ効率的な活動が期待できる。

7. ナウリコット村再生プロジェクトの方向

基本テーマ：村全体をリビングミュージアムとして再生する

タカリ族の伝統・風習を守った魅力ある村をつくり、地産品による土産物を開発する
外国人にとっての魅力を向上し、ネパール人に希望を与える(清潔感+元気)

1. 廃屋再生プロジェクト

- 1-1 1~2軒の廃屋を改修し、民宿として整備する
- 1-2 断熱性能を上げた近代モデルを作る
ネパール人を対象とする(現在約500人/年 自動車道整備による増加予測)

2. 村の共同湯治場プロジェクト

- 2-1 健康・衛生のために自助型の共同浴場を整備する(村民が薪を持ち寄るなど)
- 2-2 トレッカーとのコミュニケーションの場として足湯を考える

3. 水を主軸にした再生プロジェクト

- 3-1 水源を積極利用する
- 3-2 水力発電機の普及
- 3-3 共同水車配置 生活・産業エネルギー
- 3-4 水による定期清掃(雲南省の事例)
- 3-5 飲料水の販売
- 3-6 下水(汚水・雑排水の処理)を土壌浸透+再利用方式で解決する(数軒単位)

4. 産業支援プロジェクト

- 4-1 地産地消を前提とし、地元の産業を支援する 農業指導
・大根・わさびなど
・ジュース・酒の開発など

5. 環境教育プロジェクト

- 5-1 環境を学ぶ学校(+リビングミュージアム)として位置づける
- 5-2 国際的に学生・専門家を集めてワークショップを開催する
ゼロエミッションの村としての典型モデルに位置づけられる

観光による再生の考え方

- ・グルサンボ洞窟への巡礼が伝統的(年1回のお祭り - 33箇所の神が集合)
- ・タカリ族の伝統・風習(旧裕福層は外へ移動)
- ・魅力ある村をつくり、みやげ物を開発する 再生へつながる(外国人客)
- ・高齢化が進行するので、早く再生をすべき
- ・西欧人にとっての魅力 + ネパール人に希望を与える(清潔感 + 元気)
- (金は目的ではないが必要 ネパール全体への影響)
- ・**村全体がリビングミュージアム**
- ・提案計画があれば、村人を説得できる(13箇所の代表 - 尊重)

観光滞在

- [民家改修プロジェクト]: 1~2軒でモデルを示すべき
- ・現状: ネパール人が法事などで約500人/年 自動車道で増加する
 - ・食事のスタイルはネパール人向けでよい
 - ・タカリ料理が夢
 - ・地産地消が原則 法律化すべき
 - ・1軒購入したい(正当タカリ様式で行う)
 - ・石工・大工 600ルピー(1000円程度) 請負方式は安い
 - ・新築 4~5万円/坪
(食材・料理は検討が必要か)
 - ・断熱性能を上げたモデルを作るべき(外装は伝統 + 中は近代的技術)
 - ・着色トタン屋根は理由をつけて規制すべき
 - ・露天フロ・足湯・サウナの可能性 村の共同湯治場(単独ボイラー)

環境教育

- ・環境を学ぶ学校(+リビングミュージアム)として位置づける
- ・世界中の学生・専門家を集めてワークショップを開催する
- ・ゼロエミッションの村
- ・水を主軸にした再生計画
水源の積極利用
- ・発電機や各戸の水車配置 生活・産業エネルギー
- ・水の利用をビジュアル化することが重要
雲南省の事例 - 定期清掃

産業支援

[農業系]

- ・地元の産業の支援をする 農業指導 (JAITIをカウンターパートとして)
- ・現状: 麦、ソバ、大根、ジャガイモ、きのこ(×マツタケ)
- ・乳製品が少ない
- ・わさび・キムチなどの開発
- ・鍋料理の可能性
- ・きのこはすぐ取れる
- ・大根はネパール人が好き(売れる)
- ・りんご150ルピー(中国)50ルピー(ムスタン地域)
- ・野菜80ルピー(ポカラ)2-30ルピー(ムスタン地域)
- ・りんごジュース(ドイツミュンヘン大学学生 - マルフア)
- ・アップルサイダー・りんご酒もある
- ・石楠花(桜と同時期に咲く)

[地産品]

- ・湧き水は飲料に使える
- ・ダウラギリ水 - 写真のラベルをつける
- ・水源のフィルターをつける事業があったが失敗

ナウリコット村再生プロジェクト 構想案叩き台

* 内容は現在、検討中のものです。 090710

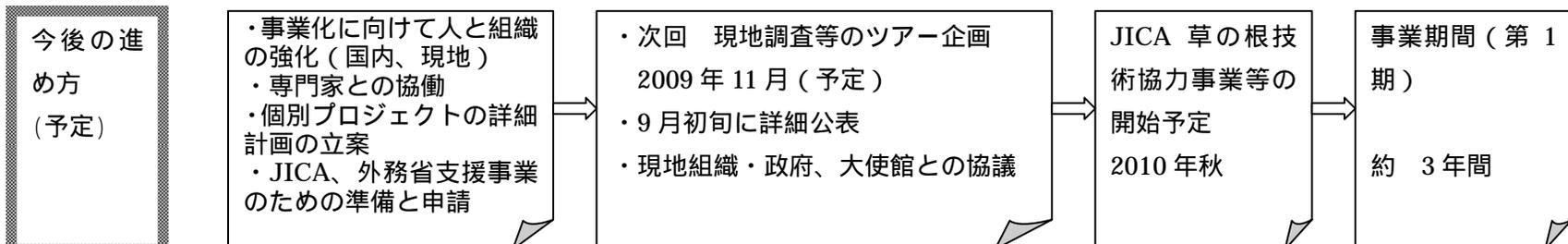
現状	人口 約 150 人 世帯数 35、6 戸 タカリー地域全体 では 13 の集落	標高 2700m 自給自足的農業 牛、鶏、ヤク放 牧（高地）	ヒマラヤ有数の巡 礼路、トレッキ ング街道 （観光ポテンシャル高）	信仰の村 3000 年前よりゲ ルカポ 洞窟への巡礼 により発達	亜熱帯からチベ ット気候に変わる 貴重な地形、風 土
進行中の 問題	若者の流失、人口 の高齢化と減少	空き家の発生、廃 屋化、家屋の崩壊 災害危険、不衛生 環境の発生	自動車の進入に よるインド人巡 礼・観光客など の急増	生活排水・汚水 問題の発生、カ リガンダキ川の 汚染	安直な新建材によ るロッジ等の建 設、伝統的地域景 観の破壊
課題と目 標	若者の回帰・定着 人口復活と活性化	一定の産業起こし 就業、収入確保	生活・生計向上	地元にとっての 誇り、自らの魅 力の気づき	外国人にとっ ても魅力の向上

構想の
コンセプト

基本テーマ：村全体をリビングミュージアムとして再生する

タカリー族の伝統・風習を守った魅力ある村をつくり、地産品を開発し、外国人にとっての魅力を上し、
地元ネパール人に希望と自信を与えるためのモデルプロジェクト。

廃屋再生プロジェクト ・廃屋を再建し、民宿として再生	産業支援プロジェクト ・地産地消、土産物、民宿経営	水を主軸とする再生プロジェクト ・動力、発電、水販売、など	人間交流プログラム ・癒しの村、足湯、トラックと村民のコミュニケーション	環境・教育プロジェクト ・環境学校、インターナショナル構想
-------------------------------	------------------------------	----------------------------------	---	----------------------------------



8. インターカレッジ・ナウリコットキャンプ構想

目的：環境教育プログラム + 地元啓発運動

ナウリコット村を「環境を学ぶ学校 + リビングミュージアム」として位置づける

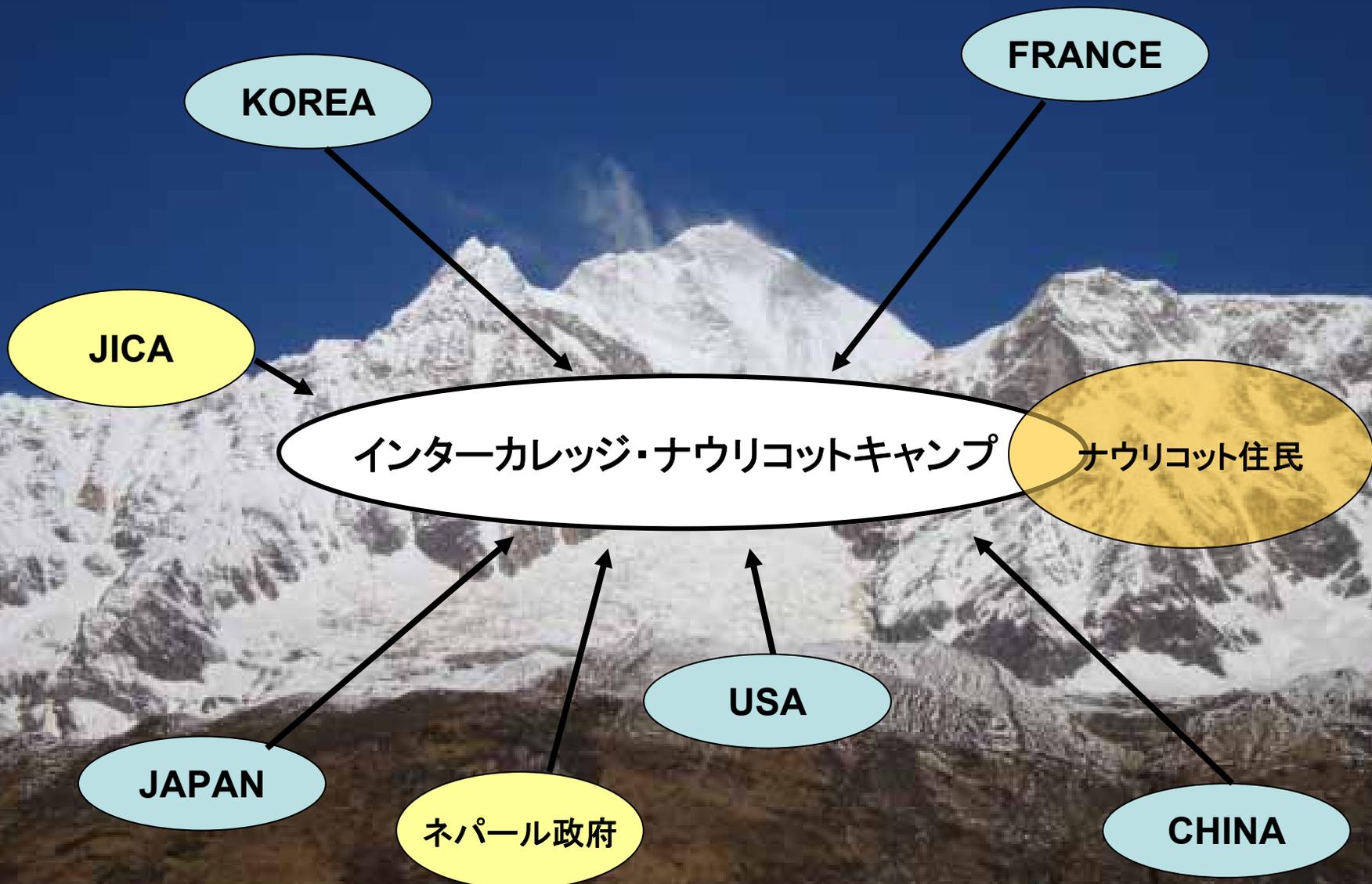
国際的に学生・専門家を集めて、集中ワークショップを開催する

植生調査、建物調査、長期的戦略の構想、具体的な提案 → モデル事業の実現



セルフビルド

ゼロエミッションの村としての典型モデル(周囲集落への波及効果)





付 . 現地事前調査団の概要

訪問国・地域:ネパール国 ダウラギリ県ムスタン郡ナウリコット村、ポカラ、カトマンズ

調査期間(視察ツアー実施期間):2009年4月5日～2009年4月16日

調査メンバー: 高橋 徹 (TDA副代表理事、(株)日本設計、調査団リーダー)
 曽根 幸一 (TDA代表理事、曽根 + 環境設計研究室)
 土田 旭 (TDA理事、(株)都市環境研究所)
 吉田 慎吾 ((株)カラープランニングセンター)
 小林 正美 (明治大学)
 山内 昭夫 (株)日本ランドデザイン)

調査目的

ネパール中西部、カリ・ガンダキ渓谷沿いのナウリコット村周辺は近年、道路整備などに伴う開発インパクトの影響を受け、生活污水問題や安直な建替えによる伝統的な集落景観の破壊が懸念されている。この度、地元住民からサステナブルで環境に配慮しつつ、住民の生活向上に役立つまちづくり方策のアドバイスを依頼され、その事前調査として地域住民ニーズの把握と課題整理、可能性のある事業の発掘を目的に現地調査を行う。

事前調査報告会の実施



報告会概要

- ・日時:平成21年7月10日(金) 18:30~20:30
- ・場所:(株)コトブキ D.Iセンター(2階、D.Iスタジオ)
港区浜松町1-14-5(JR浜松町駅北口、地下鉄 大門駅B2出口徒歩3分)

- 「ネパール・ナウリコット村再生計画」の事前調査報告会が7月10日夕、港区浜松町のコトブキDIセンターで開催された。参加者は約60名と盛況であった。
- 現地の写真を中心に、それぞれ調査参加メンバー受持ちのテーマ別に報告された。また、ネパールにおける類似のプロジェクトとして、竹中工務店大阪本店設計部の有志が行ったネパール・ゴルカ地方での、フィルム学校建設プロジェクト(無償資金援助)について、説明を頂いた。同プロジェクトの赤尾代表(竹中大工館 館長)からは、国際協力事業の理想とともに実施にあたっての現実の厳しさも語って頂いた。
- 会場での意見交換では、カリ・ガンダキ川地域は1960年代から日本との交流の歴史がある地域性を活かす、地元民の意見・意識の顕在化の必要性、日本の中間農山村地域での村活性化の取組経験など、活発な議論が交わされ、今後の進め方について有益なアドバイスを頂いた。